
とある悪魔の想像実現（イマジンリアライズ）

砂蠍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある悪魔の想像実現
イマジナリアライズ

【Nコード】

N7051N

【作者名】

砂蠍

【あらすじ】

友達のいない孤独な日々、自分の全てを否定する人々、迫り来る受験、厳しい親からの重圧……。それらに耐えられなくなり自ら命を絶った一人の少年が悪魔のような能力を手に入れて、【とある魔術・科学】の世界に転生する物語です。注意 この小説はオリ主チートな上に作者はとある科学の超電磁砲にそこまで詳しくありません。ついでに文章力がないので読みにくいかもしれません。それらをご理解の上で閲覧お願いします。

主人公紹介

【キャラ設定】

名前：黒鋼くろがね 来斗くると

【性別】：男

【年齢】：14歳

【髪の色】：紫

【能力名】：想像実現イマジナリアライズ

能力詳細：

自身が頭の中で想像したものを現実のものとして実現させる能力。想像したものであれば、火の玉や冷氣、独自に考えたオリジナルの武器なども生み出せる。さらに、特定の人物の容姿や能力を知っていれば、その人の完全なコピーを作り出すことも可能。ただし能力自体の力量を大きく超えてしまうものに関しては実現不可能。

(例)地球を一発で消滅させる爆弾を生み出すなど。
これ以外にも実現不可能なものは存在するが、これといった法則性はなく不明点が多い。

【性格】：幼稚で考えることが子供っぽく、気まぐれでマイペース。退屈していることが嫌いの快樂主義者。能力を使う際には、特殊効

果付の銃器や幻覚を使う傾向がある。

【趣味】：能力の使い道を考えること。風紀委員イジリ（？）
シャッジメント

【好きな人のタイプ】：ノリがいい人や、一緒にいて退屈しない人。

【嫌いな人のタイプ】：独善的な人・・・気まぐれゆえに他人から意見を押し付けられたりするのが苦手。

【転生後の様子】

黒鋼 来斗の転生前の記憶はほとんどなく、物心ついたときにはチャイルドエラーの施設（あすなる園）にいた。

その後、彼が8歳になる頃、ある研究機関が【想像実現】の能力に興味を持ち、権力を行使して来斗の能力を無理やり研究しようとしたが突如正体不明の小規模な隕石が研究所に落下し研究所は壊滅・実験中止となった。その後もいくつもの研究所が彼を調べようとしたがその度に、隕石が研究所を直撃する、研究機材が全てチヨコレートに変わっている、研究者全員が食事の後突然酷い下痢を起す、研究プロジェクトの最高権力者がいきなり「研究をやめる！」
と言い出すなど不可解な事件が続発。
やがて黒鋼 来斗は研究者たちの間で『災厄を呼ぶ悪魔の子』と噂され、最終的にどこの研究機関も彼の能力を調べようとしなくなり【想像実現】の研究は闇の底へと沈んでいった。

なお、現在のバンクに載っている黒鋼 来斗の能力情報は

能力名：【????】レベル：【????】
となっている。

【暁中学校について】

暁中学校の正式名称は 暁学園中等部 であり、所在地は違つが高等部も存在する。この学校で最も重視されている科目は『実践的な戦闘』であり、高レベルの能力者から無能力者までのさまざまな生徒が存在する。また、学園都市で秘密裏にされている 地下闘技場 と呼ばれる場所とも関連が強く、暁に通う生徒たちは放課後や休日そこへ足を運んで腕試しをすることが多い。

主人公紹介（後書き）

主人公の設定に関しては度々更新及び変更等がありますので、お時間があるときにたま〜に覗いてみてくださいな^w^

死を選んだ少年（前書き）

小説初投稿になります。文章力低いですが一生懸命書きますのでよろしくお願いします^w^

死を選んだ少年

ある日、少年は自ら命を絶った。このつまらない世界から解放されるために……………。

毎朝起きれば、親がさっさと学校に行けと連呼する。学校に行つたら行つたで話す友達がいないので退屈な時間を送る。進路指導で担任の先生に自分のやりたい事について相談したら、「現実の見えない糞ガキだな」「そうやってお前は一生ダメなまま生きていくんだ」などと言われ自分の考えや存在を全否定される。家に帰れば、毎度毎度やって来る親戚のおじさんが、「いいか？お前は将来この家を支える大黒柱にならなくちゃいけないぞ！」と長々お説教を始める……………。

この世界の全てが嫌いだった。総力を挙げて圧力をかけてくる親や親戚達、楽しそうに談笑するクラスメイト、自分を否定する担任、それらが存在するこの世界そのもの……………。

それら全てを振り切るために少年は学校の屋上からその身を投げ出して自殺した。死ぬってどんな感覚なんだろうと考えながら……………。

……………

「…たくよお……………。何勝手に自殺なんかしてくれちゃってんのさ?? 神様であるこのオレ様に仕事増やす気ですかコノヤロー!」

「……………すみません?」

ここは真つ白な取調室。そこには二人の人物がいた。一人は先ほど自殺した少年で、もう一人は額に【神】の文字が刻まれている金髪のヤンキー風の男。

どうやらこの空間は無念を残して死んでいった者の魂が送られる場所らしい。そしてこの場所の管理を任されているのが何を隠そう、現在少年を取り調べている金髪の神様なのだ。

「つつても死んだモンはしょーがねえし、オレもさっさとこんなクソめんどくせえ仕事片付けて帰ってえからよ、どっか適当な世界に転生させっぞ？いいな？」

神様はものすごくめんどくさそうな顔で少年にガンつけながらそう言った。

「て・・・転生??何それ??すっごい面白そうなんだけど!？」

少年は神様の口から出た「転生」という言葉に興味心身に反応する。

その反応を見た神様は一瞬あっけに取られたが、ゴホンと咳払いをすると転生についての説明を始めた。

「まあようするに転生つてのはだな、生前に暮らしていた世界に不満を抱えたまま死んだ連中をよりよい世界に住まわせてやるつつシステムだ。たとえばお前、生前の世界でどんなことに憧れてた?どんな自分になりたかった?」

「どんなって、やっぱ超能力者?」

「そうだ。お前は超能力に憧れていた。だが前の世界じゃそれらは

存在しなかった。だから今度はそーゆるメルヘンな世界に送ってやるってわけだ」

「へえ〜それすっごいイイんだけど!」

少年は神様の説明を聞いてうつとりとした表情になる。

「だろー?んじゃオレもさっさと仕事終わらせてえし、さっさと転生しちまうか!」

どうやら神様はさっさと仕事を終わらせたらしい。神様は急いでテーブルの引き出しからメモ用紙とボールペンを取り出すと、少年の方に向きなおる。

「とりあえずお前の欲しい特殊能力をつけてやる。ちなみに制限時間は30秒、時間切れになったら問答無用で無能力のまま転生させるからな?はい、いーち・・・」

神様がカウントを始める。もし制限時間以内に能力を決められなかったら転生先の世界でもきつと苦しむことになるだろう。

しかし、少年の欲する能力はもうすでに決まっていた。生前からずっと欲しがってた、少年が考え出した最高の能力。

神様のカウントが10秒を切ったとき、少年はニヤリと笑って口を開く・・・。

.....

「なるほど・・・確かにこりゃあおもしれえ能力だな」

神様がメモ用紙に書かれた文を見て感心する。

「にしてもよくこんな能力を思いつくな。つーか反則的だろこれ。まるで悪魔が使うようなのつりよくじゃねえか。まあんなことどうでもいいけどな」

「へへっ、まあね。そうだ、一つ質問してもいい??」

「なんだ??」

「これからオレが転生する世界って具体的にどんな世界なんだ??」

「そんなの自分で見てきやがれ。じゃあ準備はいいか?いくぜ?」

少年が「えっ?」と尋ねるがそれに答えるかわりに神様は天井からぶら下がっている一本のロープを引っ張った。

すると少年の立っていた床がパッと消え、少年は悲鳴とともに真っ黒な空間に落ちていった。

「ふう!これで今日の仕事は終了!さっさと帰るか!」

ものぐさな神様は落ちて行った少年のことなど気にもとめずに、一人さっさと帰り支度を始めるのであった。

死を選んだ少年（後書き）

うーん・・・文章めちゃくちゃですね>< エピローグ書くのめん
どろだったんでつい手抜きになってしまいました。次回からは気を
つけますのでお許しを~~~~:w:

黒鋼 来斗（くろがね くと）の休日（前書き）

さてさて！ここからはがんばって手抜きしないように書きます！
（
文才ないんであまり大差ないかも；w；）

黒鋼 来斗（くるがね くと）の休日

総人口230万人のうち8割は学生が占め、超能力と言う未知の力を開発している巨大な実験都市。それがここ 学園都市 である。

その学園都市第七学区の街道を、片手にフライドチキンを持って歩く少年がいた。

少年の名前は黒鋼来斗くろがね くると。私立 暁中学あかつきに通う2年生だ。

「しっかし不思議だな〜」

少年・・・来斗は手に持つフライドチキンにかぶりつきながら独り言のようにブツブツ呟く。

「総人口のうち8割が学生ってすごいね〜これじゃまるで大人はレア扱いじゃん。ま、どうでもいいんだけどさ・・・」

口の中のフライドチキンを飲み込んだ来斗は小さなため息をついた。これは決して食べたフライドチキンがまずかったと言っわけではない。ただ単に来斗は何もすることがないこの時間が退屈なだけだった。

それもそのはず・・・今日は学校がお休みの土曜日。学校が開いてないのだから友達と会うこともないし、かといって自室でゴロゴロするのも時間を無駄にしているようで気が乗らない。だから来斗はこうして街中に出て、何か面白いことがないかを探して歩いているのだった。

「でもこの街はイイよ。退屈してても探せばすぐに面白いことが見つかるからさ・・・」

そういつて来斗は左側に見える細い路地に目を向け、口を三日月のように曲げてニヤリと笑った。

来斗の目線の先には、路地の突き当たりで数人の不良と、それらにスキルアウト 囲まれている大人しそうな男子の姿があった。この様子から察すると囲まれている男子は現在進行形で不良たちにカツアゲされているらしい。

「おお、やってるやってる！！さあて早く来い来いシャッジメント風紀委員」

その様子を見て来斗は愉快そうに笑い出す・・・が、一つ重大な問題があることに気がつく。

「あーでもこれじゃ風紀委員が来る前に事が片付きそうだなあ・・・風紀委員って来るの遅っせえし。仕方ない、この来斗ティーチャーが足止めしておいてあげますか」

このままでは自分の楽しみが逃げていつてしまう。それを阻止するために来斗は早速、能力を発動するために演算を開始する。

来斗の持つ能力は【イメージリアライズ 想像実現】

この能力は来斗が頭の中で想像したものを現実のものとして実現させることができるのだ。例えば、対象を焼き払いたいときは火の玉を出す、腹が減ったときに自分のお好みの食べ物を出現させる、空を飛びたいので巨大な鳥を創り出してその背中に乗るなど、非常に強力で幅広い分野で使える能力なのだ。

(とりあえずこの路地から出られないように、“外からは自由に入られて内からは出られない透明な壁を実現”っと)

数秒もかからないうちに来斗は演算もとい想像を終えて、その見えない壁を実現させた。そして路地の前に立つとポケットからケータイを取り出して、不良たちにワザと聞こえるようにして風紀委員に通報し始めた。

「おい、何通報なんかしてんだよテメエ？」

でも当然、自分たちがカツアゲしているところを見て風紀委員に通報している奴など無視できるわけもなく、不良の一人が舌打ちして指をポキポキ鳴らしながら来斗に向かって歩み寄る。

しかし、来斗との距離が3メートルほどになったとき、突然その不良は何かにぶつかっただように少しよろめいた。

「っ痛え・・・！おいなんだよこりゃ！？前に進めねえぞ！！」

不良Aが目の前が見えない壁に両手で触れて本格的なパントマイムの動作を見せてくれる。もちろん本人はパントマイムなどやる気はなく、目の前で生きている謎の現象に困惑しているのだった。

すると他の不良たちもその見えない壁の前に集まり、外に出ようと必死でタツクルを開始した。

「くそっ！！くそっ！！どうなつてやがんだよ！！」

「何でなんもねえのにでれねえんだよクソ！！！！」

不良たちはあきらかな焦りと不安を声と表情に出してなおも壁を抜けようと必死だ。それもそのはず、先ほど来斗が風紀委員に通報してからそれなりに時間が経過している。もうそろそろ風紀委員がこの場に駆けつけてもおかしくないからだ。

一方、焦る不良たちとは逆に、来斗は口を三日月のように曲げてニシシッと上機嫌に笑っていた。

「いやあ愉快愉快。調子に乗っていい気になってる奴を一気に不安に突き落とすのは超楽しい。けど、本当の楽しみつてのはこれからなんだよなあ！」

来斗はケータイの時計を見て、そろそろ来る頃だな、呟くと、細い路地のすぐそばにある三階建てのビルの屋上に空間移動する。もちろんこれも【想像実現】^{イマジナリアライズ}の能力によるものだ。

「さて、後は待つだけ・・・おっと忘れてた！大事な仕掛けを・・・中身がとびつきり弱っちい火薬の八チドリ爆弾”をつと！」

よし準備完了！　と言って来斗は握っていた右手を開いて“本物と見分けがつかないほどよくできた八チドリ型爆弾”を眺めた。

するとその時、地上の方でツインテールの小柄な少女がどこからともなく現れ、まっすぐと例の路地へと向かって行くのが見えた。来斗はその少女をよく見るためにビルの上から身を乗り出す。

「おっ！きたきたあ白井　黒子！今日も楽しい楽しい鬼ごっこが始まりだ」

少女の姿を確認した来斗は声を殺してその場でガッツポーズを取る。そう、来斗が風紀委員にわざわざ通報したのは、レベル4の空間移動能力者^{ポーター}白井　黒子を誘き出して、鬼ごっこを楽しむためだったのだ。

「よおし今だ、それ！」

下の路地で白井 黒子と不良たちが接触したのを見計らって、来斗は手に握っていた八チドリ爆弾を空中に向かつて放り投げた。すると八チドリ爆弾は本物と全く変わらない動作で羽ばたきだしたかと思うと、まっしぐらに下の路地目掛けて下降していった。

そして、バアアアアアン！！という大音響とともに八チドリ爆弾は爆発し、白井 黒子たちがいた細い路地周辺が真っ黒い煙で包まれてしまった。

「よっしゃ、あれ絶対ヒットしたぜ。これでアイツも真っ黒だ〜。黒子だけに真っ黒・・・やばっ、めっちゃウケる！！」

「何がウケますの？」

モクモクと上がる真っ黒い煙と自分のジョークにケラケラ笑っていると、突然来斗の背後から女の子らしき声が聞こえた。

来斗が後ろを振り返ると、そこには体のあちこちに煤をつけた白井 黒子が立っていた。黒子はあきれたようなジトツとした目で来斗を見ると

「・・・またアナタですの」

と喋ってため息をついた。

来斗と黒子が知り合ったのは今から3ヶ月前のこと。きつかけは黒子が^{ジャッジメント}風紀委員の仕事でパトロールをしている時に、来斗が喧嘩売ってきた不良相手にロケットバズーカをバンバンぶっ放しているところ

ろを黒子に見つかり、今すぐやめるようにと指示した黒子にジョークのつもりでロケットバズーカを向けたところ、空間移動テレポートによって金属矢を体内に直接入れられた拳句ドナドナされてしまったということだった。

それ以来、来斗は仕事中の黒子にちよっかいを出しては、追ってくる黒子を相手に逃げるゲーム・・・つまり鬼ごっこを仕掛けてくるのだった。

もちろん会う度に必ずちよっかいを出すわけでもなく、どこで手に入れたのか分からないが捜査中の事件に関する有力な情報を提供してくれることもあった。

そのおかげか、黒子の方も最初のほうは迷惑していたが、今ではなんだかねで来斗とは腐れ縁になっている。

「よっ、白井。元気??」

「あなたと遭遇した時点ですでに元気などありませんの」

来斗が片手をあげて黒子にフレンドリーに挨拶するが、黒子の方は若干迷惑そうな顔をして冷めた返事を返すだけだった。

「うへえ…。まあでもさ、アイツら捕まえられたのは俺が足止めしておいたからなんだしさ、もう少しホットに接してくれてもいいじゃないか」

来斗はそう言って、先ほどの路地で目を回して倒れている不良数人を眺めた。

見えない壁への不安と風紀委員の出現による焦り。そんな心理的に負荷がかかっている状態でさらにハチドリ爆弾による爆発がとどめ

となり、彼らは意識を失ったのだった。

「たしかに。あなたのご協力には感謝しますの。ですが……」

「ほい……？」

「さっきの爆発は余計ですの。しかもわたくしに対して明らかに敵意を持つての行動でした。本来ならばあなたに構っている暇などありませんが、こうも下らない悪戯を繰り返されると わたくしも見逃すことができませんの。なので事情聴取……もとい“反省”していただくため今から“ご同行” お願いしますの」

『反省』と『ご同行』という単語を強調するように言うと、黒子は目にも止まらぬ素早い動きで来斗の腕を掴む。そしてそのまま背後に回り込んでその腕をねじ上げて拘束した。

さすがの来斗もこのように拘束されてしまっっては下手に抵抗するよ
うな様子は見られない。

「……はいはい分かりましたよ。任意同行でも事情聴取でもなんでもやっちゃいなよ。どのみち街中をぶらぶら歩くより“そっちの方が面白そうだし”」

だが全く焦りの表情を見せずに来斗は口元をつり上げて ニシシッ
と笑った。

黒鋼 来斗の行動パターンや物事の判断は、効率の良さや合理的云々で決まるのではなく、自身が面白そうだと感じたらソレを優先して行動するという気まぐれそのもの。今この場合は来斗は黒子に連

行されれば何か面白いことがありそうだと判断したからあっさりと任意同行を許可したのだった。

一方 黒子は悪戯が過ぎる来斗を“反省”させるために連行したい。とりあえず、なんだかんだで二人の利害が一致したというわけで、黒子はカツアゲをしていた不良たちのことはアンチスキルに任せることにして、目の前にいる悪戯悪魔（来斗）を自分の所属する一七七支部へと連行していくのであった。

とある登場の超電磁砲（前編）（前書き）

なんだかんだでぐだぐだにWいよいよ本編のキャラ登場です。主人公がいろいろと調子に乗りますのでご注意ください。><

とある登場の超電磁砲（前編）

「はあ……つまんねえ」

真つ昼間早々から、来斗は退屈そうな呻き声をあげていた。

今日は学園都市中の学校が学生の能力値を測る“システムスキャン”を行う日だった。もちろん来斗の在籍する《暁中学校》でもシステムスキャンはしっかり行われた。結果として、来斗の能力【想像実現】の能力値は能力の性質がよくわかってない以上、測定不能であったためデータには【????】と記録されたのだった。

「まあレベルが【????】ってのは問題じゃないよ。むしろミステリアスな雰囲気が出ててカッコいいから大歓迎なんだけど……」

来斗は頭上の空に浮かぶ巨大なモニター付の気球船を虚ろな目で見上げた。

「……なんでよりによって学校半日になるんだよ、訳わかんねえよ。これはなに？陰謀？オレを退屈死させる陰謀か？……黙ってないで答えろおおおお！！！」

あまりの退屈さに来斗は気球船に向かって大声で叫ぶが、当然返事

は帰ってこない。

苛ついた目で気球船を眺めていた来斗だったが、突然何か面白いことを思い付いたらしく口元をニヤリと歪める。その目線の先にあるのはやはりモニター付の気球船…。

「そーだ…あの調子こいて飛んでやがる気球船を地上から爆撃落下してやるよ。どーせアレ人乗ってないだろーし、地面に落下する直前に“次元の穴”を創って消せば問題ねーし」

そう言つて怪しげにニヤける来斗は、“銀色をしたリボルバー式の拳銃”を右手に出現させる。そして上空に浮かぶ気球船にその銃口を向けると何の迷いもなく銃の引き金を引いたのだった。

「逝つちまえ！馬鹿気球船！」

そしてダンツ という恐ろしい音とともに銃口から発射された弾丸はまるで重力の法則を無視しているかの如くものすごい速度で気球船に直撃した。

「よっしや！このまま墜落しちまえっ」

弾丸が着弾したところからプスプスと煙が出ているのを見た来斗は気球船に向かつてべっつ と舌を出すと、再び弾丸を連発し始めた。

「く、黒鋼さん！？ななな何をやってるんですか！？」

すると急に背後から甘ったるいかわいらしい叫び声が聞こえた。自分の名前が呼ばれたのに反応し、来斗が一旦銃を撃つのをやめて後ろを振り返ると、そこには2人の少女が立っていた。

1人は、ジャツジメント一七七支部へ連行されたときに度々会っている、甘ったるい声の少女：初春飾利。もう1人は、若干 啞然とした表情で来斗を見つめるロングヘアの少女：佐天 涙子。

「よう初春。何してるかって？？そりゃもちろん見ての通り 気球船爆撃落下ゲームだけど？」

来斗はさらりとした口調でそれだけ言うと、気球船の方へと目を戻し、再びターゲット目掛けて銃を連発しだした。

「えっ！？ちょっと待ってください！なんで風紀委員の見てる目の前で堂々とテロ活動しちゃってるんですか！？」

「違う違う、テロ活動じゃないって。とある少年の暇潰しだよ」

「暇潰しどころじゃありません！早くテロ活動をやめないと警備員アンチスキルに通報しますよ！？」

黒い煙を何か所からか上げて今にも爆発してしまいそうな気球船を見て、初春は来斗に向かって精一杯テロ活動（暇潰し）をやめるように呼び掛ける。

すると その呼び掛けが突き刺さるように心に響いたのが、来斗が銃を撃つ手を止めて初春の方へダルそうな顔をゆっくりと向ける。さすがに来斗もそこまでやめるように言われれば、気球船爆撃落下ゲームにも興ざめしてしまう。

哀愁を漂わせる大きな溜め息を吐くと、来斗は やーめた… と独り言のように呟いて その場でしゃがみこんだ。

「わあーったよ、ゲームはやめた これで終いにするよ。これでいいんだろ??？」

右手に持っていた拳銃をポイッと投げ捨てて、来斗は上目づかいで初春を軽く睨む。

初春は来斗がようやく危険なテロ活動を中止してくれたことにホッ…と安心の溜め息を吐くと、しゃがみこんでいる来斗のもとへ歩み寄った。

「はい、よく出来ました。黒鋼さんはやればできる子なんですからね。もうああいうことは絶対にしないでくださいね？」

そして、まるで小さな子供が何か良いことをしたときに褒めるのと同じように彼の頭をポンポンと撫で始めた。

「アツハハハ・・・ぶっ飛ばすよ初春？」

だが、年下の初春に子ども扱いされて何か妙な気持ちになった来斗は引きつった笑顔に怒りマークを浮かべて初春を脅す。しかも彼の手には【想像実現】で創り出された“血糊のこびりついた釘バット”が握られており、これでぶん殴ったらおそらく初春はあの世までぶっ飛ばされてしまうだろう・・・。

もちろん来斗本人は軽い冗談のつもりで言っているのだが、冗談が冗談に聞こえないのが黒鋼 来斗の特徴なのだ。

案の定、来斗の笑顔と釘バットが目に入った初春は「ひいひいっ！！」と搾り出すような悲鳴を上げて来斗から離れると そのまま 佐天 涙子の背後に隠れる。

「たっ、助けてください佐天さんっ」

「えっ？ちよつ初春！！？あ・・・えつと、なんかすみません、友達が調子に乗っちゃって」

急に助けを求められてしがみつかれた佐天は一瞬驚いた表情を初春に向けるが、すぐに来斗の方に顔を向けると苦笑しながらペコリと頭を軽く下げて友人の失礼(?)を謝罪した。

「うん??ああ、別にそんな気にしなくていいって、単なる軽いジョークだからさジョーク。えつと君たしか佐天さんって言ったっけ??オレは黒鋼 来斗です まあよろしく・・・それと初春?もうぶつ飛ばさないからさっさと出てきなつて」

来斗は持っていた釘バットをポイツと後ろに放り投げて立ち上がり、佐天の後ろに隠れている初春に手でおいでとジェスチャーをする。初春も来斗が釘バットを捨てたことに安心したのか「はあ~~~~」とホツとしたため息を吐きだして佐天の後ろからトテトテと出てきた。

「はあ・・・釘バット怖かったです・・・。黒鋼さんの言う冗談は本気にしか聞こえないから恐ろしいです。」

「まあ、この際冗談云々はどうでもいいよ。それより初春う?キミはオレから暇潰しの楽しみを一つ奪っちゃったんだ。埋め合わせとしてオレに何か面白いことを提供するってのが筋なんじゃないかな?」

「はい…?」

悪魔のような表情で笑いながら物を欲しがるように手を差し出す来斗の問いに、初春は訳が分からないといった感じで首を傾げた。

「埋め合わせって…ようするに黒鋼さんに暇潰しするための何かを提供するんですよね…?急にそんなこと言われても思い付かないですよ」

困った顔をして考え込む初春。来斗が普段やっている暇潰しのほとんどは、風紀委員にちよっかいをかける、街の不良相手にケンカを売る、といったかなり過激なものだ。もちろんそんなことは風紀委員である初春自身からはオススメできないししたくもない。

(ああ〜どうしよう?このままだと黒鋼さんがまたやりたい放題に…
…こんなとき白井さんがいれば……白井さん?あつ!)

するとその時、初春の頭の中で ある一つの良い考えが浮かび上がった。

「そつだ黒鋼さん!わたしたち白井さんの紹介でこれから“あの御坂さん”に会いに行くんですよ!もしよかったら黒鋼さんも一緒に

「どうですか??」

「ほわっつ・・・?あの御坂さんと言われても・・・どちらの御坂さん??」

「えっ!?!知らないんですか!?!」

初春の言う“御坂さん”という人物に対し来斗が頭の上で　?マークを浮かべていると、初春はかなり驚いた様子で声を上げる。

「ほら、あれですよ!常盤台中学が誇るエース、学園都市に7人しかいないレベル5の第三位　超電磁砲レベルガンの御坂　美琴さんですよ。聞いたことありませんか??」

「超電磁砲??へえ、そいつレベル5の第三位なんだ。でもやっぱり知らないや。けどちょっとだけ興味出てきたかも」

「じゃあ黒鋼さんも一緒に来てくださいよ。正直あたし乗り気じゃなくて・・・なんだか知らないうちに流れで行くことになっちゃったんですよ」

横から佐天が少し困った表情で手を合わせて「お願いします!」と初春に聞こえないように囁いた。どうやら佐天は“御坂　美琴”に

会うことに抵抗があるらしかった。

来斗は、憧れのオーラ全開で目を輝かせる初春と若干憂鬱そうにしている佐天を眺めながらしばらく「う〜〜ん・・・」だとか「どーすつかね〜」などと唸りながら考え込んでいたが、やがて結論が出たのか「フツ」と小さく笑う。

「悪いね、せつかくだけど今日はやめとくよ。さすがに女子軍団の中にオレ一人だけ男が混じっていたら絵画的にも微妙だし、オレも気恥ずかしいからさ。とりあえず今日は大人しく街でも散歩して時間潰すから安心して楽しんできなよ」

来斗は“大人しく街でも散歩”の部分を強調して「今日の自分は無害ですよ」と主張するように2人に言い残すと、ポカーンとしている初春と佐天にヒラヒラと手を振って2人が向かう方向とは逆の方向へと足を進めた。

（ハハツ、いくらなんでもハーレム状態はハズいつつの。にしても超電磁砲って一体どんな奴なんだろ？レベル5ってことは“アツちやん”と同類ってことか…後で聞いてみるかな）

2人と別れて街中を歩いている間、しばらく来斗は超電磁砲の御坂 美琴という人物についてあれこれと考えていた。やはり快樂主義の来斗からしてみればレベル5の第三位と会って是非戦ってみたいという気持ちはあったが、人通りの多い街中でしかも取巻き3人の目を盗んで御坂 美琴なる人物とタイマンするのはいくらなんでも無理がある。

(ま、どのみち白井がいる時点でタイムンどころか一緒に同行することはできないでしょ。顔合わせた瞬間ソッコー門前払いだろーけど)

とは言え、【想像実現】という便利すぎる能力を持つ来斗にとって、レベル5の能力者の居場所を突き止めてコンタクトを取ることなどそう難しいことではない。現に来斗は過去に7人のレベル5のうち2人との接触を果たしており、そのどちらとも来斗が暇つぶしでケンを吹っ掛けたことが発端の“バトル的出会い”だったのだ。

その時戦ったレベル5の能力者は、第四位のむぎの麦野 沈利しずりと第一位のアクセラレータ一方通行であり、特に一方通行とはその戦いをきっかけに互いの連絡先を交換しているため今でもときどき来斗と連絡を取り合う仲間になっている。もちろん電話かけてくるのはほとんどが来斗の方からで一方通行からは何か用でもないかぎり滅多にかかってくることはない。

「ん???」

ふと何かを見つけたのか来斗が急に足を止めた。その目に映った光景は、路上で営業しているクレープ屋、その前に並ぶ客の行列、そしてその周辺に散らばってクレープにかぶりつく幼稚園くらいの小さな子供たちの姿。

「みなさーん！休憩時間中はあまり遠くへ行かないでくださーい！」

近くでバスガイドらしき女性が はしゃぎまくっている子供たちに
そう叫ぶのが聞こえた。

「なるほどね、来年度から学園都市にやって来る子供たちかあ。バ
スガイドさんがいるってことは学園都市見学ツアーってところかな」

見慣れない珍しい光景に興奮の冷めない子供たちと、それを必死で
まとめようとするバスガイド……これらを見て来斗はすぐ
にこの集団が学園都市見学ツアーの連中だということに気がついた。
そしてなにやら悪戯でも思いついたように子供たちを見るなり舌を
ペロリと出してニヤけだす。

「さあーと、んじゃ今日はこの子供たちと“遊んで”暇つぶしす
るか。クククッ……」

……まったく行動に予測がつかない黒鋼 来斗。彼の今回
の暇つぶしのターゲットに選ばれてしまった子供たちはそんなこと
を知る由もなく、この世の平和しか見たことのないようなキラキラ
とした純粋な目をして学園都市見学ツアーを満喫しているのであ
った。

とある登場の超電磁砲（中編）（前書き）

二ヶ月以上開いてしまいました・w・相変わらずのへタレ文章ですが、どうぞ！><

とある登場の超電磁砲（中編）

人通りでにぎわうレンガの道……。

そんな中、甘くて美味しそうな様々なトッピングのされたクレールを片手に持ち、きゃあきゃあと笑い声をあげて追いかけてくる3、4人ほどの子供たちがいた。

しかしそんな彼らは、暇潰しと言う名の“狩り”を開始した悪戯好きの悪魔、黒鋼 来斗の今回の獲物^{ターゲット}として、彼にバツチリと目を付けられていたのである。

今はまだ、こうして何も知らずにはしゃぎ回って楽しんでいるが、おそらく来斗が本格的なハンティングを開始してその恐ろしさを知ったら恐らく数分足らずで、その笑顔は泣き顔へと変わってしまうだろう。

両手を上着のポケットに突っ込み、少しだけ身をかがめると、今回ターゲットに決めた子供たちのところへ向かってゆっくり……ゆっくりと気配を消すかのように近付いていった。

しかし……。

「あ……」

獲物である子供たちに接近していた来斗が突如その足を止めて呆気にとられたような顔をした。

その理由は、追いかけてこをしていた子供たちの中で殿^{しんがり}を走っていた女の子が道端に落ちていた小石に躓き、そのままレンガ状の地面に勢いよく倒れ込んでしまったからだ。

「あーあーあ……やっちゃったよ。にしても痛そ〜」

来斗は転んだ女の子に同情の目を向けて顔をしかめる。一緒に遊んでいた他の子供たちは女の子が転んだことに気付いてないらしく、無邪気な笑い声をあげながら姿が遠ざかっていってしまった。しかもそんな状況にさらに追い討ちをかけるかのように、女の子の持っていたクレープは転んだ拍子にその子の手を離れて見事に地面へと落下し、一瞬にして甘くスイーツから二度と食せぬゴミへと変貌を遂げてしまっていた。

女の子は何とかその場で顔を上げて立ち上がるうとする・・・が、その途中、自分の手から離れて地面に落としてしまった無残な姿のクレープに目を向ける。すると次の瞬間・・・

「うう・・・うわああ~~~~~~~~ん!!!」

転んだときの痛さとクレープを食べられなかった悔しさが ドツと一気に降り注ぎ、女の子は地面に手をついたまま大きな声を上げて泣き出してしまった。

「あ〜あ〜あ〜やっぱ泣いちゃったよ、まったくしょーがねえなあ。
このGDK(グレート デビル 黒鋼) 14歳が何とかしてやるか
」

いかにもめんどくさいといった顔で、泣きわめく女の子を眺める来斗。

だが、いかに悪戯の悪魔とはいえ、目の前で泣いている幼い少女を相手に鬼畜無礼を働くのはさすがに気が引けるらしい。

「おいその少女。大丈夫??」

来斗はすかさず女の子の元へ駆け寄ると、その場でしゃがみこんで女の子の顔を覗き込んだ。女の子は突然見知らぬ少年に声をかけられたことにビックリしたらしく、ピタリと泣き叫ぶのをやめたが、まだ目には涙をうけて「ひっく・・・ひっく・・・」と小さく声を上げていた。

「あ、やっぱり怪我してる？どれ、ちょっと擦りむいたところを見せてみな？」

来斗が尋ねると女の子は小さな声で「うん・・・」と答え、よろよろと立ち上がって膝と肘にできた擦り傷を見せる。

「うわエグい・・・。これやっぱり痛いよね??」

「うん・・・痛いよう・・・」

「オッケー、じゃあこんな傷さっさと消しちゃおうか　ちょっと目つぶってて・・・ハイ、ワン、ツー、スリー、そおらっ」

女の子が言われるままに目をつぶった瞬間、来斗は【想像実現】の力で“急速な治癒能力”を想像し、女の子の膝と肘の擦り傷を対象として能力を発動させた。

すると、女の子の膝と肘の傷口が一瞬だけ真っ白な光に包まれた。その光が消えると、さっきまで膝と肘にあった傷は跡形もなく消えていた。まるで初めから怪我などしていなかったかのように。

「あれ・・・？痛いなくなちゃった？」

急に膝と肘から痛みが消え、女の子はキョトンとした顔をして傷のあった箇所をさする。

「もう大丈夫だよ。なんせあのブラックジャック顔負けの名医様による治療だからね」。……ああ、そうだ忘れてた」

来斗は地面に落ちていているクレープに目を向ける。

（せっかく傷直したんだし、ついでにクレープのほうもなんとかしてあげるか。どれどれ……。トッピングは生クリームに苺とキャラメルか）

そしてトッピングに何が入っているかを確認すると両手を背中後ろに回し、女の子に見えないように【想像実現】の力を使って、女の子の持っていたのと同じトッピングのクレープを二つ左右の手にそれぞれ出現させた。

「はい、コレ。さっき落としちゃった分はコレで我慢してな」

来斗が女の子にクレープを渡すと、女の子は慌ててまだ目に残っていた涙を拭き、満面の笑みで幸せそうにクレープにかぶりつくのだった。

「おいしいよ！おいしいよ！おにいちゃんありがとー！」

「いいのいいの　ちょっとしたボランティアだしさ」

女の子につられて一緒にクレープを食べながら来斗は若干照れた様子で苦笑する。

「ねえ、おにいちゃんって“ちょーのーりよく”使えるの??」

「ん？まあね。どんな能力かは秘密だけど」

「どーしてヒミツなのー??」

女の子はクレープを食べるのを一旦中止すると、期待と憧れのまなざしを向けて来斗に尋ねた。だが来斗には“ある事情”があつて自分の能力を他人に知られたくないため何とか適当に誤魔化そうとするが、女の子はますます能力について興味を持ってしまったらしく、次々と どーして? の言葉を繰り返す。

その度に来斗はニコニコしながら「秘密〜」と言って女の子の頬を指でプニプニとつつく。

その行為が気に入ったのか、頬をつつかれる度に女の子は キヤツキヤツと嬉しそうに来斗に笑顔を向ける。どうやら来斗にすっかり懐いてしまったらしい。

(やっべえ、なんかこの子マジでかわいいんだけど? オレってロリコン? ロリコンなのか? いや、ロリコンとかそんなの関係ねえ)

女の子の笑顔を目の当たりにし、頭の中で何やら怪しげなことを悟りだした来斗。もはやロリコンと呼ばれようが関係ない、自分の気持ちに正直になろうと心に強く誓う来斗であった。

「コレやるよ」

来斗は自分の分のクレープを女の子に押しつけるように渡すと、両手で女の子の柔らかいプニプニのほつぺたをめちやくちやにいじりまくる。

普通ならばここまでやり過ぎると大抵の子供は嫌がり始めるところ

だが、この女の子は、来斗にとても良く懐いていることと、自分のクレープがもう一個増えたことが原因で、来斗の危ない行動にも全然嫌な顔はせず天使のような笑顔を振る舞っていた。

至福の時。この子の汚れ無き純粋な笑顔こそ、黒鋼 来斗にとつての新たな至福の時だった。

しかし至福の時とは決して長く続かないものなのである。来斗が女の子とイチャイチャしていると、少し離れた場所から

「なんだか混んでいるみたいですね」

「先にベンチを確保しておきますわ」

何やら聞き覚えのある声が聞こえた。

咄嗟に来斗がその声のした方に顔を向けると、そこには明らかに見覚えのある二人組の少女がベンチに腰掛けて何やら楽しそうに会話をしていた。

「あれ白井& amp ;初春？アイツらなんでここに？？たしかアイツら“レベル5の御坂さん”とかいう奴に会いに行くとか言ってたハズだけど……」

肝心の“御坂さん”らしき姿が見えないことに来斗は視線をベンチに座る白井 黒子と初春 飾利から視線をズラしてその周辺にキョロキョロと視線を向ける。

すると、来斗の視線はクレープ屋の行列の中にいる、黒髪のロングヘアと茶髪のショートヘアの2人の少女をとらえた。しかも

そのうちの1人には見覚えがあった。ついさつき初春と一緒にいた少女…佐天 涙子だ。

「あれは佐天さんじゃん。…ってことはその後ろに居るのが【超銃撃砲】（マシンガン）だかなんかの御坂さんって奴か」

来斗は佐天 涙子からその後ろに居る御坂 美琴に目を向け、少しの間視線を固定させていた。ちなみに来斗は間違いに気付いていないが、御坂 美琴の異名は【超銃撃砲】（マシンガン）ではなく【超電磁砲】（レールガン）である。

「ねえねえおにいちゃん！なんでずーっとあっちのほうを見てるの??？」

先ほどから遠くを見つめて何やらブツブツ呟いている来斗に疑問を持ったのか、女の子が来斗の服の袖を引っ張って尋ねてきた。

来斗は ハツと我にかえって女の子のほうに振り返る。もし女の子が声を掛けてくれなかつたら来斗は女子中学生をジロジロと眺める怪しい変質者になってしまふところであった。本人にはそんな気がなくても客観的に見れば十分怪しい…。最悪の場合、また白井に金属棒を体内にテレポートされてしまふ……。

「おにいちゃん汗びっしょりだよー？早くふかないと力ぜひいちゃうよ?」

「大丈夫…大丈夫だよ。それよりオレを救ってくれてサンキューな…」

体のあちこちに金属棒が入り込む痛みを思い出していた来斗。い

かに彼が悪戯好きな悪魔のような少年でも、あの痛みだけは二度と味わいたくないものであった。

「あーもう考えるのはやめだ。考えただけで体中が痛え……。あ、そうだ。君にコレを渡しておくよ」

来斗は金属棒が体中を、ズボンのポケットの中を探り出した。そしてズボンのポケットから名刺ほどの大きさのカードを一枚取り出すと、それを女の子に差し出す。

「これなあに??」

女の子は受け取ったカードを不思議そうに眺めながら来斗に尋ねる。カードは全面が真っ黒に塗りたくられており、裏表の両面には血のような赤い文字で【Midnight】(ミッドナイト)と記されてあった。

「まあ一種の御守りってやつかな。君は今度小学校に行くんだろ? そん時に多分役に立つからさ。…いろいろな意味でね」

カードを感心して眺める女の子に向かって来斗はおそらく女の子に高確率でやって来るであろう未来を見据えてニヤリと笑う。

カードに書かれた真っ赤な文字【Midnight】……。この文字の意味が能力開発を研究する科学者たちにとってどれだけ恐ろしいものか、それは過去に起きた“ある事件”が発端であるが、そんなことはこの女の子にとって知るよしもない。

(とりあえずこれでこの子にイカれた変態マッドサイエンティスト共が近寄ることはなくなっただけかな。アイツら研究のためなら子供相

手でも容赦しねえからなあ)

頭逝っちゃってるよアイツら、と来斗は女の子に悟られないように小さく舌打ちをし、特に理由もないが初春や黒子たちの方へと視線を泳がせる。

「…あれ？あそこの郵便局…、どうして昼間からシャッターがしまっているんでしょう？？」

すると、初春が道路を挟んだ向かい側の方を見て不思議そうに口を開く。

その言葉を聞き取った来斗もさりげなくその方向に目を向けると、初春の言ったとおり、昼間なのにシャッターがしまっている郵便局が目映った。

だが次の瞬間、その郵便局のシャッターが周辺に大音響を響かせて爆発し、跡形もなく木っ端微塵にシャッターを吹き飛ばした。

「うおおっ！なんだなんだ！？強盗か？強盗来ちゃうか？」

大きな爆音にビックリした……と言っより興奮した状態で来斗は近くの柵から身を乗り出して、郵便局からモクモクとあがる黒い煙を眺める。

直後、来斗が予想した通り、5人ほどの男たちが現金の入ったバツクを抱えて黒い煙とともに郵便局から飛び出してきた。

「何してんだよ！早く逃げるぞ！」

集団の男の1人が仲間たちに叫ぶ。

それとほぼ同時に、来斗は目の前の柵に飛び乗って強盗集団の逃走する方へと飛び上がった。

ここで勘違いされがちだが、黒鋼 来斗は決して正義だとか平和だとかそう言った理由で強盗たちを捕えて大手柄……などということとは絶対しない。かといって逆に強盗たちの逃走に手を貸すなどという、連中にとって都合のいいこともする気はない。

正義のためでも強盗のためでもない。ならばなぜ動くのか？その答えは至って簡単。それは

（退屈すぎる一日の中で強盗事件に遭遇とか最っ高のイベントじゃねーか！ラッキー今日はなんかツイてるな〜！）

…己の快樂のためであった。

しかし目の前の強盗事件に動き出す人物は来斗だけではなかった。

来斗よりイチ早く動いた白井 黒子は、来斗が柵の上に飛び上がった頃にはすでに強盗集団たちと対峙している状態であった。

「うわっ！白井の奴オレより先に…！くそっ、こんなおいしいイベントを風紀委員なんぞにくれてやるかよ」

その様子を見て舌打ちした来斗は瞬時に“自身の体を影に変化”させて、地面に着地すると同時に地面に溶け込むように姿を消した。

正確に言えば姿を消したのではなく、来斗の肉体が影に変化して

地面に潜んでいるだけである。

普通ならば周囲に人がいないところで人の形をした影があれば大抵の人に気付かれてしまうが、幸い今は強盗の出現で人々は混乱しているし、注意が強盗集団に向いている黒子にも自分の接近が気付かれる心配はない。・・・と思う。

「さあて、楽しいイベントの始まりだ」

キヒツ、と小さく笑い声をあげ、黒い影（来斗）はギザギザを描くように地面を滑っていき、気づかれぬように強盗達の背後へと回り込む。

「てめえ、死にてえのか？ああ！？」

一方、来斗の接近に気づいていない強盗達。その中で手のひらに火の玉を出現させているリーダー格の男が自分達の前に立ちふさがっている黒子に睨みを利かせて喚く。

だが黒子はまったく怯えた様子も見せずリーダー格の男を観察する。

パイロキネシスト
（発火能力者・・・それもレベル3といったところでしょうか・・・
・ですが戦う前から自分の手の内を見せている時点で素人ですわね。
たいしたことは・・・え？）

その時、黒子は強盗集団の背後で何か不自然な動きがあることに気がついた。目を凝らしてよく見ると何やら黒い影のようなものがうごめいている。

「・・・一つお聞きしますが、あなた方強盗グループは一体何人いらっやいますの?」

黒子が謎の黒い影に警戒しつつも強盗達に尋ねると、彼らは最初「はあ??」と首を傾げたが、その直後一斉に「ぎゃははははっ!」と馬鹿笑いをしだした。

「なんだお前、数も数えられないのかよっ。最近の風紀委員つてのは数字も口々に数えられねえつかあ?」

「何人だつて??バカかコイツ!!ここには5人しかいませんが何かあ??幽霊かなにかがみえるんですかあ??」

リーダー格とその隣にいる太った男が黒子を指差して侮辱するが、黒子はそのようなことは気にもならず、黒い影をじつと見つめていた。

その時、その黒い影から突然 来斗が飛び出してきた強盗グループのうち、先ほど黒子をバカにする発言をした太った男目掛けて飛び掛っていく。しかも右手には元氣よく回転する大きなチェーンソウが握られていた。

「まず一人め〜 もらったあ!」

来斗が楽しそうに叫んでチェーンソウを太った男の脳天へと振り下ろす。ターゲットとなった男はあまりに突然の出来事だったため今時分に置かれた状況の整理がつかず、ただ無防備に真つ二つにされるのを待つ豚と同じ状態になってしまっていた。

しかし・・・。

「っ！ぎゃああああ！！痛えええええ！！」

その直後に痛みによって悲鳴を上げたのは太った男ではなく来斗のほうだった。来斗は痛さのあまりにチャーンソウを投げ捨てると道路の真ん中で転げまわって胸や首を押さえたりかきむしったりしていた。

「っ痛えええええ！！白井いっ、いきなりそりゃねえだろ。痛えって、マジで痛えええええ。動脈とか肺とか肝臓とか貫通してるぜコレ」

痛さのあまり涙目で黒子を睨む来斗だったが、黒子のほうはいたって平然とした様子で

「あら、そうしたつもりですが何か？あと悪いですがこういう事件沙汰には余計な首を突っ込まないでくださいな」

と言って、さらに金属棒を3本ほど来斗の体内・・・正確には胃、右手、肩にそれぞれテレポートさせた。

「ギヤアアアアア~~~~~!!!!!!」

さらなる痛みを伴った来斗は怪獣のような悲鳴をあげて、反対側の道路で待機している初春 佐天 そして御坂美琴の元へと転がっていった。

「く、黒鋼さん！だいじょうぶですか!?!」

初春は悶え苦しむ来斗の元へ心配そうな表情で駆け寄り、佐天もそれに続く。

一方、御坂は黒子の思いがけない行動に驚いた様子で

「ちよつ、黒子！？いくらなんでもコレはやりすぎじゃない！下手したら本当に死んじゃうわよ！」

と黒子に向かって叫ぶが、それに対し黒子は大きなため息を一つ吐き、

「心配は無用ですわお姉様。適当に急所は外してありますし、それ以前に彼・・・黒鋼さんがこの程度で死ぬなどまずありえませんわ」
横たわる来斗にジト目を向ける。

「ほら、そんなくだらない芝居なんてやめてさっさと起き上がったらどうですの黒鋼さん？そこで転がっていると少々・・・というかかなり目障りなのですが？」

「・・・芝居じゃねーっつの、バカ白井」

黒子が挑発的な口調で来斗に言うと、それに反応したのか来斗はまだ痛む体をさすりながらゆっくりとその場から立ち上がる。そして「うぐぐっ・・・ぎぎっ」とうめき声を上げたかと思うと、来斗の体・・・いずれも金属棒が埋まっている部分から、血の塊が皮膚を突き破って飛び出してきた。さらに血の塊はどれも地面に落ちると同時にキンツという金属とコンクリートが当たるときの音を発していた。

「しかも相変わらず手加減とかしねえな。いくら傷口を再生できるからって痛えモンは痛えんだから少しは遠慮とかしろよアホ白井」

「あらそうですの。でももつすつかり傷は塞がったみたいですね。さすがは訳の分からない能力の持ち主ですこと」

ジト目で見つめてくる黒子に対し、同じジト目でにらみ返す来斗。その間にも来斗は【想像実現】の力を使って金属棒を取り出したときの傷を治療していたのだった。

「・・・さてと、多少邪魔が入っちゃまったけどこれでようやく強盗グループをハンティングすることができるよ」

来斗は首を左右にポキポキと鳴らしながら強盗グループの正面へと歩き出す。途中、黒子はそれを止めようと考えたが、こうなった以上 来斗を止めるのは正直なところ無理がありそうだし、後で強盗達と一緒にアンチスキルへ引き渡せばよいと結論が出たため、この場はとりあえず目を瞑れる範囲は瞑るようにしようと考えたのだった。

とある登場の超電磁砲（中編）（後書き）

・・・なんやかんやで後編まで持ち越しとなってしまうました><
次回から来斗君が暴れまくる予定です。生暖かい目で見守ってや
ってくださいね^^;

とある登場の超電磁砲（後編）（前書き）

さて、いよいよ来斗君が暴走いたします（・w・）他のアニメの能力とか披露するつもりなのであらかじめご了承ください！><それではノ

とある登場の超電磁砲（後編）

「さ〜て、どうやって楽しもうかな〜？」

にんまりと楽しみに笑いながら強盗グループの面々を眺め回す黒鋼 来斗。彼にとって最大の脅威であった白井 黒子もこれから来斗が強盗相手に大暴れするのを止める気がないらしく、小さくため息を吐きながら成り行きを見守っていた。

もつとも、来斗が周りのものを派手に壊したことで彼を拘束する理由ができ、アンチスキルに引き渡した後 豚箱にぶち込まれて、その中で 今までの様々な悪行について反省し更生した後でまともな人間となつて学業に励んでもらいたい……………。

「ねえ黒子。アイツ一人だけで大丈夫なの？」

黒子がそんな幻想的などこを考えていると、後ろから御坂 美琴が足早に駆け寄ってきた。

「彼なら多分大丈夫ですよ。まあ私からすれば強盗集団に滅多打ちにされてもらいたいくらいなのですが……………生憎、現実はそう都合がいいものではありませんの」

「……………ずいぶんと手厳しいわね。でもアンタがそこまで言うことはアイツ相当な能力者なんでしょ？？どんな能力なの？？」

黒子の発言から黒鋼 来斗について興味を持った美琴は、興味津々といった様子で黒子に質問するが、それに対し黒子は少し困ったような表情で口を開く。

「それがその・・・ハッキリ言っつて黒鋼さんの能力はいろんな点で訳が分からないんですの」

「えっ？それってどういうことなの！？」

「口ではとても説明が付きませんの。本人に直接聞いてみても『言わない』の一点張りですて・・・」

「じゃあバンクは？バンクを調べれば一発じゃない」

「もちろん調べましたわ。ただその時に」

少し複雑そうな顔で一旦言葉を止める黒子。その時の状況を説明するための言葉を一生懸命さがしているらしく、再び口を開くのに少し時間がかかった。

「・・・バンクを検索して黒鋼さんの詳細ページを開いたんですの。そうしたら突然パソコンの画面から、六本足の不気味な顔をした化け物、が飛び出てきたかと思うと私達に襲い掛かってきましたの・・・なんとか一七七支部の総力をもってその化け物は倒せたのですが、そのせいで彼の能力を調べるところではなくなってしまい結局今まで謎のままということですよ」

「ふうん・・・なるほどね。それなら後でアイツと・・・」

美琴が『アイツと直接戦ってどんな能力かをこの目で確かめてやるわ！』と言おうとしたその時、バンツという大きな銃声が辺りに響き渡った。

美琴と黒子が、もしや！？ と思つて強盗グループの方に目を向けると、案の定 強盗の一人が銃口から煙が出ている銃を手に構えていた。どうやら目の前に立つ少年・・・来斗に目掛けて発砲したらしい。だが・・・

「・・・ずいぶんと行儀が悪いな。人が喋つてる最中に脳天撃つとかマジありえねーよ」

・・・来斗は生きていた。血一つ流さず余裕の笑みを浮かべて・・・

「なっ・・・なんなんだてめえ!？」

「脳天 打ち抜いたのになんで死なねえんだ!？」

そんな来斗を見て驚愕した強盗達は、一步、二歩とじりじり後ずさりを始める。

驚きに包まれているのは強盗達だけではなかった。付近にいた美琴や少し離れた場所から様子を見ていた初春と佐天も、目の前で信じがたい出来事が起こっていることに目を疑ったくらいだ（黒子にいたっては特に反応も無し）。

強盗の言うとおり、確かに銃弾は来斗の脳天に着弾し、見事な風穴を開けた。だがその風穴の部分からは血液が流れるのではなく、代わりに額と後頭部の穴から小さな炎が燃え盛っていたのだった。

「お、てめえらイイ感じに驚いてるじゃん そういう表情見ると楽しいから特別に解説してやるよ。今の俺の体は実体ではなく炎の塊だ。ほらアレだよ今大人気の漫画『ワンピース』に出てくる火拳

のEースっているじゃん？アレの真似だよ」

来斗はそう言って炎で右手を包みながら誇らしげに説明する。それを聞いた 漫画大好き美琴センサーや強盗グループの2、3人が「なるほど〜！」と関心の声を上げる。もっとも、黒子はいろんな意味でため息を吐いていた・・・。

「てめえら何關心してんだよ！！アンチスキルが来る前にさっさとこのふざけたクソガキとそこの風紀委員の女をぶち殺してズラかるぞ！！」

すると突然、強盗グループのリーダー格・・・発火能力者の男が怒りの形相で関心の態度を示していた2、3人の仲間に向かって怒鳴り散らした。そして手のひらから再び火の玉を出現させ、来斗に向かって投げつけた。

来斗は火の玉が飛んでくるのを見ると、口を大きく開けて思いっきり息を吸い込んだ。すると、火の玉は吸い込まれるように口の中に入っていく、全て吸い込むと来斗は口を閉じ、火の玉をゴクツと飲み込んでしまった。

「なっ！嘘だろ！？ありえねえぞ！俺のレベル3の火を食っただど！？」

「ふい〜。味（火力）はイマイチだったけどとりあえずご馳走様おかげで力がわいてきたぜ〜？」

今日何度目か分からない驚きに包まれる発火能力者の男に対し、来斗はもう一度大きく息を吸い込んだ。

「お礼に本当の炎つてのを教えてやるよ？いくぜ、火竜の……」

「それってまさか……『フェアリーテイル』の!？」

来斗の口から出た台詞とその漫画の名前を知っていた。漫画好き美琴センサーは「まさか!？」と思い、驚きとワクワクの入り混じった表情をした。

「咆哮!!!」

そして美琴の予想通り、それは目の前で実現された。来斗の口から灼熱の火炎が噴射され強盗グループに炎の脅威が襲い掛かる。

強盗達は「逃げろー!化け物だあ!」「ナツだ!」などと悲鳴を上げながら迫り来る火炎から逃れるべく辺りを辺りを右往左往と駆け回る。

「……ちくしょう!このまま終われるかよ!!!」

そんな中、逃げ回っているうちに運良く来斗の視界から外れることができた強盗グループの一人が辺りをキョロキョロと忙しなく見回しており、少しして彼の目に留まったのは道路に駐車してあった一台の乗用車だった。

男はその乗用車を見るなり口元を歪めてニヤリと笑い、来斗に気づかれないように素早く乗用車に向かって走り出した。

「そら!次は『ピカピカの実の能力者 黄猿』のレーザーだぜ?そらそらそらそら〜!」

一方、強盗の数が一人足りなくなったことに気づかず超ハイテンションで人差し指からレーザーを連発しまくっている来斗。この時点ですでに二名の強盗が風紀委員である黒子の元へ倒れるように駆け込んで「ごめんなさい！ごめんなさい！今すぐ自主しますから助けてくださいお願いします！！」と涙を滝のようにに流しながら何度も何度も地面に頭を打ち付けて土下座をしていた。

残りの連中もすでに戦意をなくしており息絶え絶えにその場で膝をつき、目の前に立つ“化け物”の恐ろしさにただただ身を震わせていたのだった。

「おいおいおい君らもうお終いなのかよー？せっかくそつちは5人もいるんだし、もつと立ち回りとか工夫してオレを楽しませてくれよ……ってあれ？君らってたしか5人いたよね？？なんか一人足りなくない？？」

来斗はふと、5人いたはずの強盗たちの人数が一人減っていることに気づき、間の抜けたような顔で左右に目線を送る。

そしてちょうど右側に目を向けたその時、一台の乗用車がとてつもない速度で突っ込んできて来斗の体を容赦なく跳ね飛ばしたのだった。

あまりに突然の出来事だったため来斗は回避することも能力を使用することもできずに、体中から致死量とも言えるほどの大量の血を流しながら、40メートルほど先の道端まで無残な姿で吹っ飛ばされた。

「……黒鋼さんっ！！！」

そんな光景を目の当たりにして黒子が倒れている来斗の元へ駆け出そうとした……。だがその瞬間、パンツという鋭い銃声と共に黒子の体がバランスを崩して地面に倒れこんだ。

「えっ……。黒子!?!?」

美琴が慌てて駆け寄ると、黒子の腹部の右側あたりに銃で撃たれてできた穴があり、そこからドクドクと血が流れていき、地面にみるみると真っ赤な水たまりが広がっていった。

そしてちょうどその時、美琴の背後をさつき来斗を吹っ飛ばした乗用車が通過した。乗用車はその後200メートル程猛スピードで前進した後、急なハンドル操作でUターンをすると、今度は標的を美琴に定めて再び猛スピードで走り出す。

「よくも……。よくも私の後輩とその他一名に大怪我させたわね! アンタだけは絶対対に!」

美琴は体中に電撃を駆け巡らせて怒りを込めた目で乗用車を運転する男を睨みつけ、スカートのポケットから一枚のコインを取り出す。そしてそのコインを上空に向かって軽く放り投げ、右腕を乗用車に向けて真っ直ぐ構える。そして

「許さないんだから!?!?!」

凄まじく電撃を迸らせた右手の親指で落下してきたコインを弾く。

しかしその直前

「ぶち殺せー！ー！！リトルオーズJr~~~~！！！！」

美琴の後方から叫び声上がり次の瞬間、迫り来る乗用車のすぐ真上に“体長10メートル程の角を生やした巨人”が突如現れ、大木の幹を思わせる豪腕を振り下ろして強盗の乗った乗用車を容赦なく叩き潰した。

「えっ……？」

突然の事態に美琴は一瞬 面食らったが時すでに遅く、彼女の異名である『超電磁砲』は音速の3倍の速度で発射され、出現したりトルオーズJr（縮小版）もろとも乗用車を上空20〜30メートル程まで吹き飛ばしていた。その後リトルオーズJrと乗用車は空中で数回ゆつくりと回転しながら落下していき、乗用車はバンパーから地面に激突して原型なき姿に、オーズは頭から真つ逆さまに落下して頭部全体が地面に埋まるという形で最後を迎えた。

「あれって『ワンピース』のリトルオーズJrよね……？なんであんなのがここに ってそれどころじゃない！黒子！！」

「安心しろよ。今スペシャル名医のブラックメタル・ジャック様が白井を修理中だ。こんなちゃんけな傷ぐれーすぐに直してやるからよ」

美琴はハッと我に返ると急いで黒子の方へ振り返る。すると驚いたことに、さっきまで大怪我……というより確実に死んでいたはずの来斗が何事もなかったような姿で黒子の真横に座り込んで傷口を目視していた。

「な、直すってアンタ、ホントに黒子は助かるんでしょっかね！？」

「黒鋼さんお願いします！何とか白井さんを助けてください！お願いします！」

美琴に加え、先ほどまで安全地帯で待機していた初春と佐天も駆けつけ、初春は今にも泣き出しそうな顔をして来斗の服の袖を掴んで必死に訴えかける。

「あーもう直る直る！絶対100%余裕で直るからそう急かすなっ
て！ほら見てな」

来斗が少女3人に黒子の傷を見るよう指差した時、黒子の血液によつてできた真つ赤な水溜りが見る見るうちに小さくなっていき、それと同時に傷も徐々に塞がっていった。そして最後に小さくなった傷穴が完全に塞がると来斗は「ふう〜お終い」と言つて思いつきり背伸びをする。

「黒子！大丈夫なの？黒子！」

「起きてください白井さん！」

名医 ブラックメタル・ジャックこと来斗による治療が終わるや否や美琴と初春が今だ横になっている黒子に必死に呼びかける。一方 佐天は2人とは数歩離れた場所で少し複雑そうな表情で少女3人を見つめていた。

「よつ佐天さん どうしたの？なんか悩みでもあんのかい？」

「え？わっ、黒鋼さん！？」

そんな佐天の様子に気がついた来斗が佐天に声をかけるとかなり

ビックリしたような反応をされた。が、すぐに佐天さんは笑顔を作り

「わ、私ならこの通りぜんぜん問題ないですよー。でも白井さんが助かってほんとに良かったです！黒鋼さんの無茶苦茶ぶりもかっこよかったですし」

と言って、さらに「もしよかったらメアドとケー番交換しませんか??」と自分の携帯を取り出した。

来斗も「ああ全然OKだよ」と笑顔で返し、携帯の画面を開いて赤外線でお互いのメアドと番号を交換を済ます。

「よし交換完了つと。まあ暇なときとかメールしたりすつから、佐天さんも悩みとかがあつたら電話していいぜ。きつちりかつちり相談に乗っちゃうからさ」

来斗が満面の笑みで佐天を元気付けるように言葉をかけたその時、遠くからサイレンの音がいくつか聞こえ、その音がだんだんと大きくなつていった。

「おーっとアンチスキルのお出ました。白井が起き出す前にさっさと逃げるとしますか」。じゃ、またな佐天さん」

アンチスキルの接近に気づいた来斗は手短に別れの挨拶を済ませると全速力でその場から駆け出しいき、裏路地を横切ったところで佐天の視界から彼は完全に姿を消した。

「黒鋼……来斗さんか……」

彼が去った後、佐天は携帯の電話帳を開いて来斗の名前とメアド

を眺めながら彼の名前を呟き、少し元気付けられたかのように小さく微笑んだのであった。

とある登場の超電磁砲（後編）（後書き）

『ワンピース』やら『フェアリーテイル』をメインにイメージリアライズさせちゃいましたが・・・はたしてコレでよかったのだろうかちょっと心配です；w；

そして次回以降から来斗以外のオリキャラを登場させるつもりです・
w・

悪魔への挑戦（前書き）

今回はかなりしんみりとしておりますです・w・文章は相変わらずド下手ですがよろしくお願いします・><

悪魔への挑戦

例の強盗事件が起きたあの日からすでに十日ほど経ったある日の夕方頃。

「ねえ黒子？」

「なんですのお姉様？」

もうすぐ綺麗な夕日が見られる放課後の時間、名門 常盤台中学校から自分たちの寮へと帰る御坂 美琴と白井 黒子の2人の姿があった。

「ちょっと聞きたいことがあるんだけど、この前の黒鋼なんとかって奴のことなんだけど……」

「お姉様」

美琴の言葉を強制的にぶった切るように、黒子は静かにだが鋭い口調で言い放つ。

「何度も言っておりますが、あの黒鋼さんとは絶対に関わらないで

くださいな。私のお姉様があの様な身勝手に精神年齢の低すぎる性格最悪の低脳モンキーに汚されるなんて想像しただけで絶望しますの」

「・・・勝手に絶望してればいいじゃない。てか、そこまでいろいろ言われると余計に気になるのよ。お願い！なんでもいいから教えて！通ってる学校とかでもいいから！」

美琴は精一杯の気持ちを込めて、両手を合わせて隣りを歩く黒子に頭を下げる。

一方、黒子はお得意のジト目で美琴を見つめていたが、やがて大きな溜め息を吐くと、仕方がないといった様子で口を開いた。

「・・・彼の名前は黒鋼 来斗、暁学院中等部の2年生ですの」

「暁学院って・・・、たしか去年の大覇星祭で3位だった学校よね？ふうんアイツあそこに通ってるんだ・・・なるほどね」

「言っておきますけどお姉様？これ以上のことは何も教えるつもりはありませんの。それとも一つ、興味本意で彼に近づくようなマネだけは絶対にしないでくださいな。万が一、お姉様と黒鋼さんが本気で戦ったりでもしたら周囲にどれほどの被害がでるか分かりませんから」

黒子は何やら危ないモノに興味を引きつけられる美琴に対して何やらとても嫌な予感がしたので、彼女に釘を刺すかのように再び強めの口調でそう言う。

・・・が、美琴の方はと言えば、黒子の警告など全くと言っていほど頭に入っておらず、すでに未知の能力者である黒鋼 来斗と勝負することを前提とした思考回路が構築されているのだった。

「大丈夫よ黒子。私はちょっとアイツの能力について聞き出すだけだから、アンタの心配していることは極力そうならないようにするから平気よ」

「その言葉自体に信用性がありませんの……。それ以前に、黒鋼さんはあの強盗事件での銃刀法違反ならびに暴行障害の現行犯で我々風紀委員が指名手配している最中ですよ。ですからたとえお姉様が彼と遭遇できたとしてもその瞬間私が彼を拘束し、そのまま逮捕という流れになりますから結局無駄足になるだけです」

「なんか知らないけど、なんで私とアンタが常に一緒に行動していることを前提に考えてんのよ？てかアンタも知っているとと思うけどさ、あの時 銃で撃たれたアンタを助けてくれたのはあの黒鋼って奴なのよ？今までの経路がどうであれ一応は命の恩人なんだしそこまで嫌わなくてもいいんじゃないの？」

美琴の言葉に黒子は うっ…と、言葉を詰まらせて黙り込むと、数秒程間を空けて、言葉を探すように口を開く。

「いえ、その…別に彼のことが嫌いとかではありませんし、理由はどうであれ私を助けてくださったことに付きましても感謝しておりますの…。ただ…」

「ただ??」

黒子の言葉をさらに掘り出そうと美琴が問い掛けたその時、彼女達から前方斜め右の方向から激しい爆音と共に一つの巨大な火柱が現れたのだった。

「な、何あれ!?!」

美琴が周りの建物をものともしない高さで燃え上がる火柱を見て驚いたように声をあげる。

火柱を見てレベル5の能力者である美琴が驚いた理由は、単純に爆音などに驚いたのではなく、火柱の大きさにあった。今、彼女達がいる地点から火柱の上がっている場所までの距離がおよそ1000〜150メートルほどあるのだが、そのくらい離れた距離から見てもその火柱の直径は巨木の幹ほどに見え、天辺は空を見上げてやっ

と見えるほどの高さであった。

それほどの大規模な火柱。これがもし能力者の仕業だったのなら、そいつは明らかにレベル4以上・・・もしくはレベル5に匹敵する能力者。もしくは・・・

（ひよつとしてあの火柱 黒鋼って奴の仕業じゃ・・・この前だつて火系統の能力たくさん使っていたし、もしかしたら・・・！）

そう考えた瞬間、美琴は火柱の燃え上がる方向を目指して全速力で走り出した。後ろから「待つてくださいお姉様！これは風紀委員の仕事ですのー！ー！！」と黒子の叫ぶ声が聞こえたが、その声に立ち止まることなく建物と建物の間に来た細い路地に駆け込んだ。

火柱の出現した場所はビルや店などの建物をはさんだ向かい側の道路だ。そこまでたどり着くには人一人がやっと通れるくらいしか幅のない裏路地を通らなければならない。だが美琴はそんな狭い裏路地を疾風のような速さで駆け抜け、途中に置いてあるゴミ箱や食べ残しに群がるネコ達を見事なステップジャンプで避けながら表の道路を目指して走る。

（今アイツを逃したら次はいつ遭遇できるか分からない・・・！とかあの火柱出したのが黒鋼って奴かどうかも分からないけど、どっちもち相当な実力の能力者のはず！急がないと！）

3匹目のネコを飛び越え、曲がり角をまがったところでようやく表道路への出口にたどり着いた美琴はハアハアと息を切らして表の歩道に出ると、「まだどっかに行つてませんようにー！」と念じながら周辺を見落としのないように見回した。

そしてその直後、美琴の視界にある光景が映し出され、美琴は自身の勘と運氣のよさに思わず笑いがこぼれる。

道路のあちこちには巨大な炎の燃えカスらしき小さな炎が点在し、その餌食となつたと思われる50人ばかりのチンピラ達が道の中央で山積みになされており、さらに、いかにも俺が倒したと言わんばかりにそのチンピラの山の上に腰掛ける一人の少年の姿があつた。

少年は裏路地から飛び出てきた美琴の姿を見て最初は意外そうに目を見開いていたが、すぐにその表情は消え、嬉しそうな様子で小さく笑う。

・・・最初は風紀委員がアンチスキルをおびき寄せるために派手な火柱出したんだけど、まさかこんな大物が釣れるとは思つてもいなかったぜ」

キツシツシとおかしな笑い声を上げて少年・・・黒鋼 来斗は積み上げられたチンピラから飛び降りてその場で思いつきり背伸びをする。

そんな来斗に美琴は不敵な笑みを浮かべて口を開いた。

「それはこっちの台詞よ。変な火柱があがったから誰がやったのか
と違って来てみれば、まさか私の探し人の仕業だったとはねー・・・

」

「探し人・・・？アンタが俺を？？ひよっとしてアンタも白井と同じ
風紀委員だったりすんの??」

不思議そうな顔で尋ねる来斗に美琴は表情を変えずに首を横に振
る。

「違う違う。私は・・・そうね、アンタの能力に興味を持った一般
人ってところかしら?」

「ハハツ、そりやまたずいぶんとヤバそうな一般人に目え付けられ
たもんだな。で?どーすんの?・・・やっぱ勝負??」

「話の分かる奴みたいねアンタ。そーいうの嫌いじゃないわ」

挑戦的な口調で来斗が笑うと美琴は体中からバチバチと音を立て

て電気を進らせる。それはまるで戦闘が始まる前兆のようにも見えた。

さらに幸か不幸か、2人の周辺にはなぜだか人が1人もいない。

黒子もとつくにこの場所に到着していてもおかしくないのだが、不思議なことに先ほどから全く姿を見せない。

「それにしてもちよつと変ね。なんか周りに誰もいないし、黒子もさつきから全然来ないし……。黒子が納得するように、アンタと勝負するための言い訳を考えてたのに」

周囲の異変となかなかやって来ない黒子に疑問を抱いた美琴。そんな彼女の様子を見て来斗はさらりとした口調でこう言った。

「ああそうだった。今俺の半径80メートルの空間は本来の次元から切り離してあるから誰も入って来れないよ。最初は風紀委員の誰か……。てか黒子あたりをおびき出してからかおうと思ってたんだけど、やって来たのがアンタだったからちよいと作戦変更したってわけ。ただ……」

来斗は一度言葉を止めて周辺の景色を眺め回す。真っ赤で綺麗な夕日、人気のない静かで広い道路、街中を思わせてくれるビルやお店。どこにでもある、ありふれた風景である。しかし……

「……この風景だとどうもやる気が殺がれるんだよな。だってほら、どこにでもある町並みって感じだけでバトルっていうイメージが0じゃん。どうせ闘うならもっと雰囲気のある場所にしようぜ？」

来斗にとっては決闘する場所として相応しくないと感じたらしく、美琴に場所を変えるよう提案するのだった。

美琴の方も、どうせならもっといい場所で闘いたいと思ったらしく、彼の提案に対しあっさりとOKを出した。だが彼の言う雰囲気のある場所というのがどこにあるのか気になった美琴はさりげなく来斗に尋ねてみることにした。

「でも決闘に相応しい場所って一体どこなのよ？それらしい場所なんて全然検討つかないけど」

「行けば分かるさ。まあ条件としてはやっぱ人があまり通らない場所、あとは時間帯かな？うん、日が沈んだくらいがちょうどいいな」

「ふ〜ん……まあ何でもいいわ！アンタの奇妙な能力を知るいい機会だし場所に文句はつけないわ！あと言うっておくけど、私は全力で勝負するつもりだからアンタも手を抜いたりしないでよね」

「もちろん抜かないさ、アンタが俺を本気にさせるくらい強ければね。でもまあ俺を楽しませることができたならご褒美に俺の能力について教えてやるよ。ま、せいぜい頑張りな」

来斗はわざとらしい言葉使いで明らかに美琴の怒りのツボを刺激して挑発するかのように言う。そして当然、気の短い美琴はその挑発を真に受けて、引きつった笑みと怒りマークをこめかみに浮かべてそれを表現すかのように体からビリビリッと電気を駆け巡らせる。

「……言ってくれるじゃない……。そこまでいろいろと言われたら期待に答えないと悪いわね。上等よ、やってやるうじゃない！」

「そうこなくっちゃ。それでこそ学園都市が誇るレベル5ってやつだ。……さてと、そろそろ時間だし例のバトルフィールドまで行くとしますか」

美琴の威嚇を軽く流し、来斗は建物の影に消えていく真っ赤な太陽を見つめながらさういふと、【想像実現】の能力を発動させるべく演算もとい想像を開始する。

すると次の瞬間、その場に立っていた来斗と美琴の姿がテレポトで空間移動するときと同じような形で一瞬にして姿を消し、辺りには山積みになって気を失っているチンピラ以外誰もいなくなってしまう。

「うつつ……！」

2人が姿を消してから数秒後、道端で倒れていた一人のチンピラが消え入りそうなくらいの小さな呻き声をあげて先ほどまで来斗と美琴が立っていた場所に目を向けると、震えるような声で小さく口を開いた。

「やべえ……やべえぞあの女……！下手したら殺されるだけじゃ済まされねえ……！なんたってあのガキは……」

チンピラ男はなんとか意識を保って言葉を出そうとしていたが、再び徐々に意識が薄れて行き、最後に言おうとしていた言葉は小さすぎてとても聞き取れるものではなかった。だが、もしこの時彼の口元

で耳を澄ませている人物がいたとすれば、このように聞き取れたはずだ。

「……デュアルスキル多重能力者」と。

悪魔への挑戦（後書き）

今回のお話は書いてても微妙だと感じちゃいました><次回はいよいよ来斗と美琴が闘います・w・できるだけ早く更新して行きますのでどうかよろしくお願いします・w・

想像実現VS超電磁砲(前書き)

めちゃひさしぶりの更新です。文章力、ストーリーは相変わらずア
レっすが、よろしくです><

想像実現VS超電磁砲

日も暮れて夕闇が空を覆う時間帯のとある学校の校庭。

現在の時刻は午後7時半頃。この時間になってくると運動系の部活をやっている生徒達も各々後片付けなどを終えて下校しているので校庭には誰一人いない状態になる。

だが、その誰もいないはずの校庭に2人の人間がいた。一人は黒鋼 来斗、もう一人は御坂 美琴。

二人は校庭の隅にあるベンチに腰掛けており、来斗は少し気まずそうに苦笑いを浮かべており、美琴は若干イライラしたようすで腕組みをしている。

「えつとさ…部活動の連中帰ったみてーだな？」

「そんなもん見りゃ分かるっつーの」

来斗が恐る恐る美琴の様子を伺うように声をかけてみるが、美琴は彼の顔も見ないで冷たい反応を見せた。

「…いやその、マジで悪かった」

頬を小さく掻きながら来斗は申し訳なさそうに言った。

美琴の機嫌が悪いのは、今から3時間ほど前までの成り行きが原因だった。

まず、来斗の能力で二人は街中からどこかの学校の校庭に空間移動をしたのだが、その時の時刻が4時半頃…つまり学校では部活が行われている時間帯だ。

当然、校庭には部活動に励むたくさんの生徒たちがおり、来斗と美琴はそのど真ん中へと出現してしまったのだった。

その時は来斗が咄嗟に機転を利かせて自分と美琴を透明化させて周囲の生徒達に見つからずにすんだ。

とりあえず部活動の生徒達が帰るまで、ということではらく二人は透明状態のまま部活動を見学していたのだ。しかし、見学開始から30分もすると、部活見学に飽きてしまった来斗がその場で爆睡してしまい、そのせいで透明状態が切れて姿が顕になった美琴は近くにいた運動部の顧問らしき先生に見つかってしまったのだ。

おかげで美琴は無断で学校の敷地内に侵入したということ、1時間と30分の間、爆睡し続けている来斗の分までたっぷりとお説教を受けてしまったのだ。

「てか普通あのタイミングで寝るとかおかしいでしょ。もう少し周りの状況とか見なさいよね」

「いやホント悪かった。その分しっかりと闘いを楽しませてやるからそれで勘弁してちょうだいよ」

来斗両手を合わせて頭を下げた。美琴も、彼が一応反省している様だし、そろそろ本題の“勝負”に入りたいところなので、とりあえずこのことは水に流すことにした。

「まあいいわ。それよりさっさとアンタと勝負したいんだけど、なんか言いたいことがある？」

校庭の真ん中の方に足を運びながら美琴は尋ねる。

「んー…とりあえず手は抜くなよ？とだけ言っとくぜ」

来斗は美琴の後に続いて挑発的に笑う。

やがて両者は校庭のちょうど真ん中辺りに立ち、ある程度距離をとって戦闘体勢をとる。

「そんじゃ何時でもいいぜ。先制攻撃させてやっからどっからでもかかって来いよ」 来斗はまたもや挑発的な口調で、人差し指をクイクイと動かして美琴に攻撃を促す。それにより美琴の戦闘モードのスイッチが体中から迸る電気とともにONになり、

「上等じゃない…だったら遠慮なくこっちからいかせてもらおうよ
！！」

彼女の叫びとともに青白い電撃が来斗目掛けて放出される。

「おー来た来た！あらよつと！」

だが来斗は電撃が飛ばされた直後に右側へと大きくジャンプして回避をとった。

「っ…！なかなか反応がいいじゃない！けど次からはそう簡単に避けられないわよっ…！」

初撃をあつさりと回避されて多少驚く美琴だが、今度は初撃を遙かに上回る大きさの電撃を放った。

「おつと今度のは避けるのは無理だな。だったら…火拳！」

来斗は咄嗟に右手に炎を纏わせて迫り来る電撃に向けて放った。炎と電撃はぶつかりあうと同時に激しい爆風を生み出し、大量の砂埃が辺りを覆い尽くす。

「ちよつ、何も見えない！」

「隙だらけだぜ、森羅天征」

「っ…！」

視界が見えなくなって隙ができた美琴の背後に回り込んだ来斗は、漫画NARUTOに出て来るペイン天道の技 森羅天征を想像し実現させ、強力な斥力で美琴を吹っ飛ばす。

「わ、わわわっ！！っ痛っ！…この！」

森羅天征を受けた美琴は校庭の隅まで飛ばされ体を地面に強打したが、それでも何とか体勢を立て直して立上がり、巨大な電撃の槍を放って反撃をする。

「甘いよ！双魚理」
ナツキチ シュウゴ

来斗はブリーチの登場人物 浮竹十四郎の使用する二刀の武器“双魚理”を出現させ、飛んで来る電撃の槍に左手で持つ刃を向ける。

電撃が刃に触れた瞬間、電撃が刃に吸い込まれていき、ほんの一瞬间の間が空いた直後に右手の刃から吸い込んだ電撃の槍が美琴に向けて放出された。

つまり、電撃を跳ね返したのである。

「う、うそ！？そんなのアリ!？」

美琴は目の前の現象に驚愕しつつ、電撃を避けるために横へ転がり込む形で回避をとった。

「…それってブリーチの浮竹十四郎が使う武器よね。正直なところ相当厄介ね」

「だろうね。双魚理を使っちゃえば遠距離攻撃系の能力者はほとんど對抗できなくなるぜ。さて、こっからどうする？電撃姫さんよ？」

「さつきからそーとー余裕かましてるみたいけど…、電撃を攻略したくらいで勝ったと思うなっ！」

電撃が封じられた：ならば次の手を！と、美琴は右手から強力な磁力を発生させて地面から真つ黒な砂鉄を引き寄せる。

磁力によって集められた砂鉄は美琴の手中に収まりやがて徐々に剣の様な形に生成されていった。

「うおっ、何それ！？何かすげーかっけーんだけど！？」

「砂鉄よ。しかも磁力で生成された砂鉄は振動数がハンパないから、触れるとちょーっと血が出たりするかもね！」

そっいうや否や美琴は砂鉄の剣を握って来斗に駆け寄り、砂鉄剣を頭部目掛けて振り降ろした。

「何かそれ…っ！おもしれーわ！NARUTOの我愛羅の技にそっくりだ。お前…もっ！NARUTO読んでるって、危ねっ！…クチか??？」

当たれば大量出血間違いなしの砂鉄剣を絶妙なタイミングと素早い動作で躲しながら来斗は余裕な様子で美琴に問い掛けて来る。

「っのっ！ちょこまかっ！逃げ回るなあ！！」

こめかみに青筋を浮かべて美琴が叫ぶ。

「逃げ回るも何もお前、攻撃が単調なんだよ。砂鉄剣を振り降ろすか振り回すかのツーパーターン…特に振り上げる時と振り回した後の隙がありすぎだったの。だからこんな風に」

美琴が今まさに砂鉄剣を振り上げた瞬間、来斗はその一瞬の硬直を狙って、手に持つ双魚理で美琴の右手肩を突き刺した。

「っ痛…!!」

双魚理による刺傷の痛みにも美琴は咄嗟に砂鉄剣を手放して反対の手で傷口を押さえた。

幸い傷口はそれほど深くはなかったが、傷口を押さえる美琴の手と常盤台の制服はみるみるうちに鮮血に染まっていた…。

「…その怪我じゃもう砂鉄剣は振り回せねーな。さて、お次は…」

と、ここで来斗は言葉を止めた。その理由は、美琴の頭上に集まっていたいく砂鉄…それも先ほどの砂鉄剣を生成した量とは比べ物にならない、超大量の砂鉄の塊だった。

「…お次はどうするかって？校庭中から根こそぎ集めたこの大量の砂鉄をアンタにお見舞いしてやるから覚悟しなさい!!」

美琴は傷の痛みにも顔を歪めながらも、大量の砂鉄を鞭の様に操って来斗目掛けて振り降ろす。

(…こいつは素で躲すのは無理だな)

目の前の砂鉄の鞭を見て来斗はそう判断すると、瞬時に自分の頭上にバリアを展開して砂鉄の一撃を防いだ。

だが、砂鉄の猛攻はこれに止どまることはない。今度は右からも左からも正面からも、いやどの方向からも、まるで一切の反撃を許さないかの様に砂鉄の鞭が襲いかかって来る。

来斗もそれを防ぐために自身を包囲する様にバリアを張り巡らせる。

(こりゃビックリだ。まるで本物の我愛羅そっくりの芸当だな。だったらこっちは……)

来斗は今の防戦一方な戦況を覆すべく、あるモノを脳裏に思い浮かべた。それは

(九尾化!!) 次の瞬間、来斗の体から禍々しい赤黒い物質…九尾のチャクラが溢れだし、彼を包み込んで狐の形を象り始めた。

その尾の数は4本…。原作NARUTOをよく知る美琴は攻撃の手を止めて啞然としてしまう。

「な…何よアレ……?」

九尾化して元の姿の原形すら残さぬほどに変貌を遂げた来斗を目の前に、美琴はの思考は混乱する。

（ちょっと何なのよアレ！？てか、さつきから透明化やら双魚理やら変なバリアやら…そんなでもって今度は九尾化って、一体なんの能力者…いやそもそも超能力なのこれ！？）

混乱する思考を整理しようとするが、九尾化した来斗はそれを待ってはくれなかった。

「ガアアアアアアアッ！！！」

九尾の来斗が咆哮をあげた。その咆哮の衝撃で、先ほどまで砂鉄の猛攻を防いでいたバリアは粉々に吹き飛び、周囲の大气に暴風を巻き起こし、地面に広範囲にわたる亀裂を走らせた。その有り様はまるでちよつとした災害そのものであった。

「グルルウ……」

やがて凄まじい咆哮が止み、低い唸り声をあげて来斗が美琴に向き直る。その姿はまさに獲物を狩るときの獣と同じ。美琴の全身にゾツとする恐怖感が駆け巡った。

「……これはマジでヤバイわ……。もしかしてアイツ、本気で私のことを殺す気で闘ってるんじゃない……」

美琴は直感でそう感じた。

(こうなったらもう技の出し惜しみは無しね。早くレールガンで勝負を決めないと……)

美琴はスカートのポケットからコインを取り出し必殺技であるレールガンを放とうとする。

だがそのレールガンが放たれることはなかった。

コインがちょうど空中に弾かれた瞬間、九尾のチャクラを纏った手が伸びてきて美琴の顔面を鷲掴みし空中へと放り投げ、空いているもう片方の手で美琴を殴り飛ばした。

その勢いで美琴は校庭の外まで飛ばされ校舎の壁に叩きつけられた。

「つつつがはっ……!!」

全身の骨まで響く痛みに美琴は声にならない悲鳴をあげた。だが来斗の攻撃は止まることなく、今度は九尾のチャクラを口元に集めて球体…尾獣玉を形成し始めた。

「……こ、のバカ狐…！そんなに私を消し飛ばしたいの、か！」

痛みに耐えながらも何とか態勢を立て直した美琴は、数億Vの電撃を手から放ち反撃を試みるが九尾の衣の前ではまるで歯がたたず、こうしている間にも尾獣玉の発動まで刻一刻と迫っている。「はあ、はあ…なんて奴なのよ！？私の電撃をまともにくらって平然としているなんて…。まるであのバカと一緒にじゃない！」

美琴は脳裏に“ある男”を思い浮かべて顔をしかめる。

まさか“アイツ”以外にも私の電撃を直撃して平然としている奴がいたなんて…。

「何ボーツとしてんだ〜？？」

「……」

来斗の声に美琴は ハッと我に帰る。

「…へえ〜アンタ、その姿になっても普通に言葉話せるんだ。てっきり理性がぶっ飛んでるのかと思ったわ」

「まあ、知性と言語能力は残るように設定してあるからね。でないとお前もとつくに死んでるしここいら周辺もめちゃめちゃになっちゃう。それはそれで面白そうだけど」

「面白くないっつーの！てかだいたい、アンタ、のその訳のわからん能力は一体なに！？そもそもそれ超能力なの！？」

「だーから、お前が俺を楽しませることができたら教えてやるって言っただろ？もつとも、もう時間切れみたいだけどな」

「時間切れ？なんの…」

「何って？尾獣玉のチャージ時間のことだよ。これでお前もジ・エンドってこった」

「尾獣玉………しまったー！！」

美琴は来斗と会話しているうちに尾獣玉のことをすっかり忘れてしまっていた。そのせいで尾獣玉の発射はもう目前。当たれば肉体は跡形もなく消滅し確実に死が待ち受けている。

「このままではまずい…と、美琴はその場から離れようとしたが、

「おおっと、逃がすかよ」

九尾の来斗から四本の手が伸びてきて美琴の両手両足をがっしりと掴み、身動きを取れなくして確実に尾獣玉を命中させようとした。

「えっ！ちょっと！嘘でしょ！こんなの当たったら冗談抜きで死ぬわよー！ー！！」

この状況にはさすがの美琴も死の恐怖を感じてしまった。動きを封じられた状態で前方から放たれる尾獣玉……。もはや絶望と己の死しか見えてこない。

だがそれでも来斗は動揺した様子一つ見せずに、容赦なく尾獣玉を発射した。

「そんじゃおやすみ。常盤台のレールガンよお」

尾獣玉を放つ寸前、来斗は口元をニヤリと歪めて小さく呟いたのだった……。。

想像実現VS超電磁砲（後書き）

いったん区切ります。久々に書いてみてやっぱりどうもアレですな
><文章無駄に長いし構成めちゃくちゃだし・・・w次からもっと
精進します!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7051n/>

とある悪魔の想像実現（イマジンリアライズ）

2011年8月16日13時44分発行